

平成 29 年度研究助成 研究実績報告書

代表研究者	坂口幸弘
研究テーマ	事故・災害等で大切な人を突然に亡くした遺族が死者の生きた証を伝承することの効果

1) 研究の背景と目的

事故・災害等で大切な人を突然に失うことは、遺された家族に大きな衝撃を与え、その後の適応過程は困難かつ長い道のりとなりがちである。遺族にとっての喪の課題の一つとして、死者との関係を断ち切るのではなく、「新たな人生を歩み始める途上において、故人との永続的なつながりを見出すこと」が挙げられる。「死者の生きた証を伝承する活動」は、この課題に対する対処方略の一つと考えられる。本研究の目的は、事故・災害等によって大切な人を突然に亡くした遺族が、死者の生きた証を伝承する活動をどのように捉えているのかを明らかにし、死者の生きた証を伝承する活動が当事者遺族の適応過程に及ぼす影響を探ることである。

2) 研究の方法

- 《研究 1》事故・災害等によって突然に家族を亡くした遺族 236 名を調査対象とした郵送による質問紙調査を実施
- 《研究 2》事故・災害等によって突然に家族を亡くした遺族 18 名を対象に半構造化面接調査を実施
- 《研究 3》死者の生きた証を伝承する活動の一つである「生命（いのち）のメッセージ展」を大学で開催して、来場した学生を対象とした質問紙調査を実施

3) 研究の成果

研究 1 では、遺族支援団体の代表者を通じて依頼した郵送による質問紙調査において、126 名の遺族から回答が得られた（回収率 53.4%）。回答者の性別は女性 88 名、男性 34 名、無回答 4 名、平均年齢は 56.1 歳(SD=10.60)であった。死別からの経過期間は、9 カ月～354 カ月で平均 149.2 カ月(SD=74.46)であった。故人との続柄は、故人からみて親が 90 名、配偶者 15 名、子 7 名、きょうだい 4 名、孫 2 名、無回答 8 名であった。被害内容は、交通事故が 97 名、殺人 9 名、その他 13 名、無回答 7 名であった。簡易版悲嘆質問紙(BGQ)の回答結果として、47 名(47%)において複雑性悲嘆が疑われることが示された。また PHQ-9 日本語版を用いた結果、中等度以上の抑うつに該当したのが 44 名(40%)であった。主たる結果として、1)活動のきっかけは、「亡き人の死を無駄なものにしなくなかったから」が 69%と最も多く、次いで「いのちの大切さを他者に伝えたいと思ったから」(53%)、「事件・事故・災害の風化を防ぎたいと思ったから」(51%)であった。2)活動をして良かったと思うのは「取り組みを通して伝えたいことが伝わっていると実感できたとき」が最も多く(63%)、次いで「同じような経験をした仲間に出会えたとき」(59%)であった。3)活動をする前後での気持ちの変化に関して、「亡き人と一緒に生きていると感じるようになった」(40%)が最も多く、次いで「亡き人に、社会で新しい居場所ができたと思える」(33%)であった。4)活動の影響として、回答者の 88%が“今”を生きていくうえでの「助けになっている」と答えていた。

研究 2 の面接調査では、飲酒運転によって大学生の一人息子を奪われ、「生命のメッセージ展」を発案した女性は、活動の動機について、当初は息子を残したい、アートという形で生き続けさせたいという思いだけだったとした上で、次のように話された。「(事故・犯罪等で亡くなった)彼らは、とても無念な死を迎えている。彼らのその死を無駄にしたくない。亡くなられた命を活かす形として残したい。生きているって素晴らしいことなんだよと伝えたい。」

研究 3 では、回答者の 9 割以上が、遺族が死者の生きた証を伝承する活動を行うことの意義について「私たち一人ひとりがいのちの大切さを考えるきっかけになると思う」「安心・安全な社会につながると思う」「事件・事故の風化を未然に防ぐことができると思う」「亡き人への供養や弔いになると思う」と回答した。この結果は、死者の生きた証を伝承する活動の社会的意義をあたためて支持するものであるといえる。

今回の調査結果から、事故・災害等で大切な人を突然に亡くした遺族にとって、「死者の生きた証を伝承する活動」は、受け入れがたい死に対する遺族の向き合い方の一つであり、遺族にとっての意義は、故人の存在を自分にとってだけではなく、社会の中でも生かし続けることにあると考えられる。加えて、故人の死に新たな意味を付加する試みであるともいえる。その死を契機に、社会が良い方向に変わるのならば、故人の死に社会的な意味を持たせることができるのである。また活動への参加を通じて、遺族同士が出会い、体験や思いを共有し、ともに支え合う機会にもつながっていることも示唆された。深い悲しみにある遺族が、死者の生きた証を伝承しようとする活動を支えることも一つのグリーフケア（遺族支援）のあり方であると思われる。